

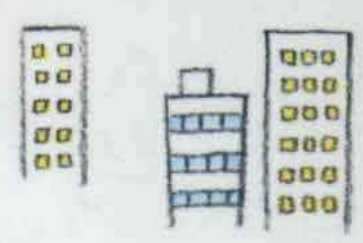
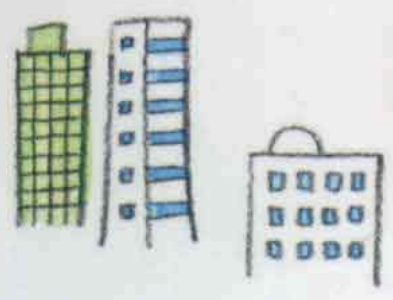
文庫書下ろし



ト
ー
キ
ョ



放
浪
記

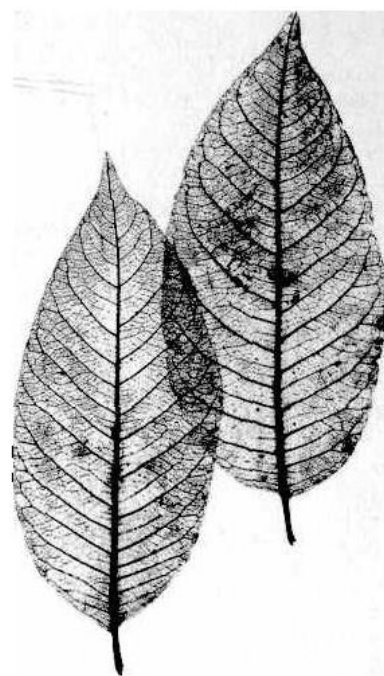
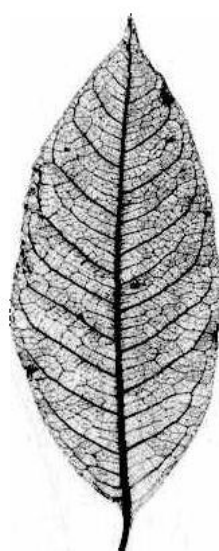


山田スイッチ



知恵の森文庫


知恵の森文庫



ほうろう き
トーキョー放浪記
やまだ
山田スイッチ

2005年12月15日 初版1刷発行

発行者—古谷俊勝

印刷所—萩原印刷

製本所—フォーネット社

発行所—株式会社光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 編集部(03)5395-8282

販売部(03)5395-8114

業務部(03)5395-8125

© switch YAMADA 2005

落丁本・乱丁本は業務部でお取替えいたします。

ISBN4-334-78400-3 Printed in Japan

Ⓔ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

トーキョー放浪記

山田スイッチ

光文社

この作品は知恵の森文庫のために書下ろされました。

トーキョーの居場所を探して

場所が全てを決定しているのです。
今住んでいるその場所が。

ハイッそういうわけだね！ 本日は東京の居場所について考えてみたいと思います。
毎日の生活に多大な影響を与えているのは、今そこにいる「場所」だと思いませんか？
職場であつたり、家庭であつたり、今住んでるアパートの部屋であつたりと。
やつとのこととでたどり着いた場所。そう。我々は気付かぬうちに、その場所に「たどり着いて」いるのです。毎日の生活の中でたくさんのお事が起こり、その事態に対応し、様々な選択を経て。気付けばその場所に、「たどり着いて」いるのです。

住んでる場所を中心に。職場・遊び場・食べ物屋へと出かけていくわけですが。その場所にはたくさんの方がいるにもかかわらず、出会える人はほんのわずかです。何故かとい

うと、人には一人ずつその人の「世界」があつて、その世界への扉は簡単に開いたり、開かなかつたりするからです。そう、たくさん人のいる場所は、「たくさん扉がある場所」ともいえるのです。だけでも普段私たちは、その人の扉も見えないほどに、すれ違つてしまっているのです。もしもすれ違い様に飛び込みたくなるような相手がいたら、それがあなたにとっての運命の相手です。気になる扉が現れたなら、その扉の隙間から飛び込んでいける勇気が必要なのです。たとえどう考えてみても「損をしそうな」扉や、過去に損をした扉であっても。気になったのなら、開けてみる価値は充分にあつたのです。

私の大好きな小学生のハナちゃんは、運動会で一等を取ったときに、

「ハナね、走りたいから走つたの！」

と、顔を紅くしながら言つていた。この、「走りたいから走つた」という、ただ単に「したいから」という気持ちだが、この世で一番ピュアで、一番強い。そんな気持ちで扉に向かえば、開かない扉はないと思う。どうしても気になつて、「開けたいから」開けた扉の前では、何一つ後悔することはないのです。そして扉を開けた世界では、昨日までと違つた毎日が、ドドンと待ちぶせているやもしれません。

東京では、この運命の扉が突然ドドンと開くことがあります。この、どうしても気になる扉を開け続ければ、求めた場所に、何年かのその先に、いつのまにか「たどり着いて」

いるはずです。

気になる扉を気になるままに、開け続けた結果……私は就職して板前になったり、お笑いになったり、貧乏になったり、友達と一緒に暮らしたりしていました。その後もアルバイトでホステスになったり、コラム屋になったり、ブラジルヘサンマを売りに歩いたり。全ては開けてみた扉の先で待ちかまえてた出来事です。最近ではあまりにも不思議な整体を受けて、体のねじれが取れたりしてます（あまりにも不思議だ……）。

これからもまだまだ扉は現れ、その世界には飛び込み続けていくでしょう。そしてもし、「最近、扉が開いてないな」と感じたら。そろそろ場所を変えて、気になる扉を見つける時期かもしれません。

本書では、私のトーキョーで出会った数々の扉と、飛び込んでみた数々の扉が次々に現れます。ひどい目に遭^あつても、開けておきたかった世界の数々です。それは東京のあちこちで開く扉です。そして最後、その扉の世界を通って気になる場所にたどり着いたなら……！

そこがあなたの求める、「居場所」なのかもしれません。

本文イラスト／山田スイツチ

トーキョー放浪記 目次

トーキョーの居場所を探して

3

第一章 あなたに会いたくて。

それでも、歌舞伎町の空は青かった
12
毎日は簡単につまらなくなくなる
18

恋ヶ窪に恋はない
27

トイレに生きる格言が……！
32

ヤツらに気を付けろ！
37

戦争とモス。
47

東京・お洗濯事情
51

第二章 これは出会いなの？ 出会いじゃないの？

世田谷のゲンズブル
58

インドに学べ！ 64

そよ風を感じることも大事だと彼は言った 72

恋人達のララバイ 76

怖い女は好き？ 80

オフィスの女豹になりたい 92

お見合いパブのナゴムギャル 100

第三章 あなたに会うために。

運命の仙骨 108

仙骨に呼ばれて 114

仙骨LOVE 124

卒業旅行 OROKA 135

拓郎がトラウマ 140

置き忘れた肉まん 147

第四章 とりあえず、何でもいいから出会つとけ!!

青春は門前仲町から 160

キケンな街の予言者 166

ラテンナイトは五反田で 175

ベジタリアンとニクタリアン 181

夜の体はキレイだから 185

レンタルの王子様 189

東京くフラッシュバック・タウン 194

終わりにくトーキョーの居場所を探して 200

第一章 あなたに会いたくて。

あからさまに濃い人間には濃い人生がついてきます。人生を薄味にしないためには、時には濃い人に出会うことも必要です。

それでも、歌舞伎町の空は青かった

今日。私の実家では、「神棚」が燃えました……。

朝、起きると共に実家から電話があり、出てみると慌てた妹のヒロちゃんの声で、何の脈絡もなくこう切り出された。

「お姉ちゃん！ チョットうち、神棚が燃えてんだけど!？」

「……はあ!? 神棚が……?」

「アタシもう仕事行くけど、また火が点くかもしれないから、家に来て!」

そう言ってガチャンと電話は切れた。火事? ボヤ? 一体どの程度の出火? つーか、また火が点くかもしれないんだったら、お前は家にいろや!

そんなわけで慌てて実家に駆けつけると、我が家のボヤは本当に「神棚一つ」燃えたきりで鎮火しており、一階の部屋はススだらけになっていた。

妹と祖母の間には第一発見現場特有の、

「おばあちゃん、神棚が真っ赤に……！」

「火の元を消せ！」

などのやりとりがあつたみたいだが、何故この状態で定時に出勤していくのか……。妹の気分は計りかねるところだった。しかし、燃えたものが「神棚」であつたため心配になつて祖母を見たが、祖母は意外と落着いていた。恐らく出火原因は神棚のロ・ウ・ソ・ク……。しかし、命も無事だったことだし、何も言うまいと私は後始末の準備にかかった。家の中はいたるところに真っ黒なススがはびこっており、「本当かよ……」と思つたが、現場をホウキで払つてゐるうちに何故か私は、二〇〇一年に新宿・歌舞伎町で起きた、雑居ビル火災のことを思い出していた。

燃えた雑居ビルは四階建てで、消防法に明らかに違反した造りをしており、逃げ出せなかつたビルの従業員とお客さん四十名近くが犠牲になった。この火災現場にあたる雑居ビルは、燃える一年前に私が働いていた新宿・歌舞伎町のマンガ喫茶のすぐ近くにあつたのである。そのマンガ喫茶からは百メートルも離れていない場所だった。消火の様子がテレビに映つた時はあまりにも見覚えのあるビルだったので、腰が抜けた。

「歌舞伎町にあるマンガ喫茶」で、何故働こうという気になつたのか。考えてみたら単に、

「雇ってくれたから」という理由に他ならなかった。

恐らくあの頃、私は雇ってもらえるならば大概の場所では文句も言わずに働けたんじゃないかと思う。それくらい当時私を雇う相手は見つからず、「頼むから肉食わせてくれ」といったオーラを出していた私は、片っ端からアルバイトの面接を受け、落ちていった。何せ、牛井屋のバイトも落とされるくらいなのだ。牛井一つ満足に作れないと思われていた私の志望動機は、「肉くいたい」気持ちのみであり、マンガ喫茶のバイトもお金を稼いで「肉くいたい」以外に他ならなかった（しかも志望動機は一生懸命考えた結果、「マンガと喫茶が好きなので……」という、しょうもないものだった……）。

そんなわけで歌舞伎町に通勤していた私なのだが、たかがマンガ喫茶のバイトといえど、歌舞伎町は場所が場所だけに、仕事で行き帰りする際にはかなりヘビイな人生模様を覗かねばならぬ場所であった。朝八時にマンガ喫茶へ出勤すると、ビルの陰から半裸の老女が出てきて、

「返せヨーッツツ!？」

と、号泣しながら道に訴えかけたりしていたのだ……。

返せって……何を……？ 人生を……？

そう。朝の八時じゃまだまだ夜が続いているのだ……。そんなわけであるからして、出

勤すると店には電車に乗り遅れたのか、家に帰る理由がないのか。マンガ喫茶のナイトパ
ックで夜を明かした少女達（予想以上に匂う）と、一晩中インターネットをみていた原因
不明のオッサン達（なぜか全員秋葉系……）が帰っていくのを、「ありがとうございました
ー！」と。週に三度は送り出していた。そして、トイレ清掃のためにトイレのドアを開け
ると、そこにはゲロでできた地獄模様が描かれていたりするのだった。ゲロでできた地獄、
ゲロ地獄……。オー・ノー！。

せめて昼飯だけは、多少清らかなところで食べたい……。そう願っても、歌舞伎町でそんな場所などなかなか見つかるはずもなく、あつたとしても静かな花園神社までは思ったより遠く、着いたら昼飯を食う時間がなくなるので、あえなく職場の休憩室で食べようとするのだが、その休憩室は薄暗い上に埃くさく、生きた心地がしないのだった。しかも、休憩室に行くために階段を使って移動していると、ヒトラーのような店長に、

「何故、本日の唐揚げの出が悪いのか！」

と、道で問われてしまう……。階段での移動は危険だ。そんなこんなで外のファーストフードに救いを求めると、そこはホストとキャバ嬢（全員が金髪・男はスーツ、女は肩ヒモワンピース、全員顔の色が茶！）の、「マクドナルド歌舞伎町店」なので、私はよく「つぼ八」の入ってるビルの屋上に逃げ込んだのは、一人で弁当を食っていた……。